
忘れてはいけないもの

カイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘れてはいけないもの

【Nコード】

N8847F

【作者名】

カイザー

【あらすじ】

天才少年カイが、師匠であるアイン教授に「大切なものを見つけるために高校に戻りなさい。」と言われる。そこから様々な危険を乗り越え、カイは大切なものを取り戻す・・・

プロローグ

武藤カイは、わずか小学校三年生で大学レベルの勉強をするほどの天才であった。なので五年はやく大学を卒業し、大学の教授の弟子として働いている。それだけならまだしも、彼は容姿がととのっており、そしてスポーツ万能だった。

彼はその後、大学の教授の助手として働くことになった。

その雇ってくれた大学の教授は、カイよりも三歳年上で名前はアイ・ン・シュタインと言う。とてもカイに優しくて周りからひいきしていると言われるほどだった。

だが、そんなある日アイ・ン先生からこう告げられた。

「カイ・・・君の頭の良さにはまったく文句を言うことはできないのだが・・・高校に戻りなさい。」

「はっ！？教授！一体僕がどうしたって言うんですか？」
カイが聞き返した。

「君には大学で教授として働くほどの知識は豊富だ。だが・・・科
学者だとしても忘れてはいけないことがあるのだよ・・・。」
アイ・ンは優しく告げた。

そこからカイの物語ははじまった。

第一章「高校」

第一章「始まり」

教授アインは、実は大学の生徒に指導をしながら別の私立の学校で校長も勤めていた。そして、その私立の高等学校にカイは強引に連れて行かれることになったのだ。もちろん、連れて行かれる前にカイは必死に抵抗したが、最終的にヘリコプターで強制的にそこへ連れて行かれた。

「でっ、俺はここでなにを学べばいいんだ？」

「それはここで高校生活を送ることで解決する。」

アインが答えた。

「さて、ついたか・・・。」

カイは、前を見た。

見て思ったことはひとつ・・・大きすぎる！

あの天下の名門校東大の敷地の約十倍ぐらいはある。そして、最近創設したばかりという事で、なぜか壁が輝いている！

「こ、この学校で暮らせと？」

「そうだ。存分に楽しめばいい。担任の先生にはもう既に話している。」

アインは言い終わると同時に、上空のヘリからたれてきたロープをつかんで遠くに飛んで言った。

「なぜヘリ？・・・ってそんなことはどうでもいいとして、教室を拝見してくるか。」

カイは、巨大な学校の敷地の中にある学校に向かって歩き出した。

「その君ー！まてえい！」

上から眼鏡をかけた青年が降ってくるではないか。

「な、何だお前は！」

「ふっ。僕は真。学級委員の近藤 真だー！」

何気に馬鹿にしていらないか・こいつ。とか思いながらカイは自己紹

介をした。

「俺は、武藤カイ。今日からここの生徒になった者だ。」

「ええっ！？僕と同じで遅刻したんじゃないの!？」

そいつは、アニメのキャラクターでもすることができないほど大きく口を開き、大げさにリアクションした。

「遅刻って冗談だろ？学級委員なのに……。」

カイがあきれたら、そいつは更にシヨックを受けたみたいなので謝っておいた。

「まあ、君を迎えに来たっていう理由で遅刻の罰を免れるとしよう。」

「

初めて会ったときのように目の輝きを取り戻したようだ。

「じゃあ迎えに来たついでに学校につれてってくれ。」

カイは、うまく相手の言葉を利用して言った。だが、真はまったく動揺せずに了解してくれた。

だが、さすがに真っ向から先生には会いに行きたくないという真の理由で後門から入ることにした。

「この学校は去年できたんだ。」

「最近の話じゃないか！よく生徒が集まったな。」

「集まったといっても二千ぐらいだけだね。」

「結構な人数じゃないか！」

カイが真に突っ込みをしていたら後ろから声がした。

「真！学級委員という存在の人がこんなところでなにをやっているんですか！」

そこにはピンク色の髪の毛をした女の子が立っていた。

「や、やあ。今日も元気そうだ」

その後真はその女の子に追っかけられて、帰ってくることはなかった。カイは一人でぽつんと立っていると代わりにその女の子がやってきた。

「ごめんね。学級委員ともあるうものが、あんなんで……。」
彼女はため息をついて言った。

よく見ると、とても容姿が整っていて科学以外興味のないカイでさえ、胸が波打った。

「・・・あなたは誰ですか？」

「私は、怜奈。ここの生徒会長を務めているわ。」

「うう、転校して初日からこんな学校を代表する人に出会うとは・・・。」

カイは、心の中でそう思い真に自己紹介したように怜奈にも自己紹介をした。

「ふう〜ん。ようするに転校生ね。・・・どのクラスに入るか分かってるの？」

「いえ。実は全然聞いてないですよ。」

カイは答えた。

「珍しいわね。転校生がどのクラスに入るか聞かされていないって。」

あのオヤジが！カイはヘリでさっそうと逃げて行くアインに殺意を覚えた。

「まあ、担任の先生が俺がここに来ることをすでに知っているはずなんで・・・。」

「じゃあ職員室に行けば分かるわ。そこまではついて行ってあげる。」

こんな広い学校なのだ。初めてきた人にとっては時刻だろう。

「あの〜今授業中じゃないんですか？生徒会長が授業に出なかったらやばいんじゃない？」

「安心して。私は授業に出なくてももついでにいけるし、丁度生徒会の仕事を職員室に出しに行くことになってるから。」

「なるほど。さすが生徒会長。先を読むのがうまい。」

カイは生徒会長のすごさを認めほめた。

「え？そ、そんなんじゃないって。」

かなり動揺していることから照れているのだろう。

「？ どうしたの？カイくん。」

「いや、なんでもないです。」

カイは何かごまかした。怜奈は少しカイの顔をみていたがどうやら信じてくれたようだ。

「そう。じゃあいきましょ。」

彼女はそういつて歩き出した。カイはあわてて彼女の後を追った。

「・・・それでっ？前の学校はどうだった？」

カイは、アイン教授に大学を卒業していることや、飛び級していることは、生徒には内緒にしておけと言われていたので即興でうその話を作り上げた。

「うう〜ん、楽しかったですよ。授業も簡単だったし、友達もいっぱいでしたし。」

実際のところ高校で過ごした時間はあまりにも短く友達など一切できなかったのだが・・・。

「本当に？カイくん、人を近づけさせないようなオーラを放ってるんだけど。」

「それは本当ですか！？・・・あまり自分のことは考えたことがなかったんで・・・。」

確かに、あまり自分のことについては知る必要がないと思っていたぐらいだ。

「ついたわよ。ここが職員室。」

カイは怜奈につれられて職員室に入った。

その瞬間クラッカーの音がした。

「歓迎するよ！カイ！君のようなアイン教授の推薦をもらって入ってくるような子は！」

「えっ！？え？」

当然にもアイン教授のことや僕が大学を卒業していることは怜奈は知らないのです、回りのカイを歓迎している先生の顔を、順番に覗き込んだ。

「あの〜先生。僕の過去は生徒に話してはいけない約束じゃあなかつたすか？」

「そういえば、そんなことをいつていたような気がする……。」
先生はすまんうっかりだ、とこっちを見てきた。

「どういうこと！？カイくん！」

「いやっ、これには深いわけが……。」

カイは何とか身振り手振りで怜奈に説明した。話し事態は分かっ
てもらえたのだが、カイを信用しなくなってしまったらしい。

「それで担任は誰？」

「私だ。名前は、ゼル・ローレシアと言う。」

その男は、何やら暗い空気をかもちだしていた。しかし、スーツが
なかなか似合っている。

「担当の教科は体育ですか？」

筋肉がもり上がっているので、体育だと予想をつけ訊ねた。

「いや、彼は数学を担当している。なぜこんなにゴツイかは、近日
中に分かるよ。」

他の先生が言った。

その後、生徒会長は先に教室に戻って行った。どうやら次の授業の
準備のようだ。

「お前も、怜奈と同じクラスなのだぞ？今教室の様子を見に行っ
たらどうだ？」

「い、いえ。図書室で本を読んでいます。」

カイは、レナのほうをひらりと見て行った。

あの様子じゃあ、許してもらえそうにないな。

カイは、苦笑しながら職員室を出た。

「カイ。一応これももって行くといい。」

後から先生は、なにやらきたない和紙をカイに手渡してきた。よく
みると、この学校の地図のようだ。

「何で最近建ったばかりの学校の地図がこんなに古いんですか！？
ここに宝でも隠されているんですか！？」

カイは、本当にどうしたら良いか分からないぐらいの顔をして見せ
た。

「すまん。教授の趣味でな。ちなみに本当に宝は隠されたいらしいぞ?」

教授。会ったときから変だとは思っていたけどここまでおかしいとは。

カイは心の中で教授に悪態をつき、地図を広げた。

どうやら、文字や輪郭などはすべてインクで書かれているようだ。

先生も気になって覗こうとしているので、たぶんこの地図の中は俺だけしか見てはいけないみたいだ。

だが、カイはそんな先生を無視して図書室を探した。

図書室は体育館と同じぐらいの広さか。。。。ば、馬鹿な!!

もう一度見直してみたが、どうやら図書室は体育館とおなじぐらいの広さらしい。

距離はここから、一キロ!!

。。。教授はなにをしたいんだ?

結局カイは、教授の思惑が分からないまま図書室。。。いや図書館に着いた。

「へえ。結構しっかりした本があるじゃないか。」

カイは、横にずらりと並んでいる本を眺めながら、これが天国つてやつなのかとため息をついた。

「。。。あなたは誰ですか?」

明らかに私服の青い髪の子がいすに深々と座っていた。

「やあ、新しくこの学校に入った武藤カイだ。よろしく。」

「私は、カノン。この学校の生徒。。。何事件を解決するのが私の趣味。。。。」

静かに自己紹介をしたカノンは、その体に似合わずかなり冷静沈着な雰囲気を見せていた。

「へえ。すごい趣味だな。聞いたことがない。」

「私だつてこのような趣味をつくるつもりはなかったのだが。。。。」

はまっつてしまっつて。」

「まあ、俺もこの学校に来るつもりはなかったんだが・・・天文学的確立で偶然きてしまったのだ・・・やはり成り行きというものは怖いな。」

「ええ。同感です。」

明らかにこの自分よりも背の低い少年のペースに乗せられている気がするが、それは気にしないで、なぜ授業を受けていないのかを聞いた。

「私は、あなたと同じで元は大学生だったのですが、アインに連れられてここに来てしまいました。」

「一体何なんでしょうね。って何で俺がアイン先生に連れられてきたってこと知ってるんだ？」

「私の手下が聞きつけてくれました。安心してください。ほかの人には言いません。」

カノンは静かに紅茶をすすった。

一方断然カノンのペースに飲み込まれたカイは、ただそれをぼろりと眺めるだけであつた。

「ちなみに私はようやく十歳になりました。」

「お前・・・どんだけ飛び級したらそうなるんだよ。」

カイが言つた。

「私はアメリカのエスパー部隊に所属していましたが、必然的に頭がよくなるみたいです。」

そういつて、彼は分厚い本を取り出した。

「その本は何だ？」

「黒魔術の本です。」

子供がなに勉強してんだよ！！

カイは心の中で突っ込みを入れた。

「世界は私の思っていたほど小さくはなかったみたいです。これをこの図書館は教えてくれます。」

「た、確かにそうだけどさ。黒魔術はやりすぎでしょう。」

「あなたはこの学校に来た意味をちゃんと理解しましょう。」
カノンは落ち着いて言った。

「どうせアインの事ですから、あなたの足りないものを補うためにこの学校に連れ込んだんでしょ。」
「どんだけ的確に当ててるんだ！この子は！」

「あなたの人間性でかけているものは私にはわからない。しかし、あなたは本当に世界が広いことを気づかないと・・・後悔すると思います。」

な、なんだろう。この部屋のBGMがベートーヴェンの運命だからこんなに心に響くというわけではなく、奴のあの静かな言葉が俺の心に響いてくる。

「完敗だ・・・。この学校には俺の人間性で欠けているものだけでなく、新たな知識までもが身につくってことだな？」

「まあ平たく言えばそうなります。」

カノンは再び本を読み始めた。

「さっき言ってた手下って誰の事だ？」

「虫です。」

彼は、手を上に挙げた。すると、どこからともなく昆虫の羽音が聞こえてきた。

「私の手下は、カプトムシです。先ほども言いましたが私はもとエスパー部隊に所属していました。」

「・・・なるほど。エスパー部隊は昆虫を操れるのか・・・。」

カイは無理に頭を納得させた。今まで勉強してきたことが、水の泡になっていくの影で感じながら・・・。

「いえ、個人個人で違う特性をもっています。」

カプトムシは、カノンの指先にきれいに止まった。その様子から相当、なついているのだろうと予測した。

「おおっと！ここにいたのか！カイ。」

頭にこぶのできた真が再びカイの前に現れた。

「やあ。生きていたんだな。」

「ああ……。生徒会長あれでも一応空手五段だそうだ……。」「
真はドサツといすに覆いかぶさった。

「ん？君はカノンじゃないか！成績優秀な上、女によくもてるわが
宿敵！」

「失礼ですね。私だってもてたくてもてているわけではないし、勉
強はあなたがやるうとしていないから私に負けるのです。」

カノンは誰に対しても同じ話し方をするようだ。

「まあ、それはどうでもいいとして……。カイ！君が来てくれな
ければ会が始まらないじゃないか！」

カイは困惑した。

「何の話だ？俺はもう少しこの図書館に居たいんだが……。」

「そういうことじゃなくて……。君の歓迎会をするんだよ！」

学級委員はカイの方をつかんで無理やり引きずって行った。

「さて、私も行くとしますか……。」

カノンもカイについて行った。

「おっ。わがライバルが珍しく図書館から出た。」

「久しぶりに話があう仲間ができたのです。その仲間の歓迎会に
なくてどうするんですか……。」

カイはカノンにウインクした。

俺もこの不思議な少年の事は少し気になっていたので相手のほうか
ら来てくれるとは丁度いい。

「それで歓迎会って何やるんだ？」

「それはお楽しみみて事にしておいてくれ、カイ。」

なんかとてつもなく嫌なことがおきそうな予感がするのだが気のせ
いか……？

「じゃあ君たち二人は教室に入らずここで待っていてくれ。」

「分かった。」

真は教室に入っっていった。

「なあカノンいったい何が起きると思う？」

「さあ。私はあまりあいつらと話したことがないので……。」

カノンは言った。

「なるほど……。かなり不安なんだが。」

「大丈夫だと思いますよ。あなたのような頑丈な人なら車にひかれても死にそうにないので。」

カイは苦笑した。

「ハハハツ……。さすがに車にひかれるのは勘弁だ。」

カノンと話していると知らぬ間に十分ほど時間がたった。

そしたら中から、真が出てきた。

「準備OKだよ。入ってくれ。」

カイは恐る恐る扉の中に入ってしまった。

第二章「歓迎会」

パーンッ！

カイは教室全体を見わたした。

そして生徒一人ひとりがクラッカーを持っていた。

「歓迎するよ！カイ！これからよろしくな！」

学級委員の言葉に一齐に教室全体がもり上がった。

「よろしく！カイ。」

「今年一年楽しもうぜ！」

「クラッカーの火薬が……！！！」

カイは久しぶりにこんな大勢に歓迎されて、どうしていいか迷った。

「カイ……。ここは普通に自己紹介をして時を済ませましょう。」

心の中に声が響いた。どうやらカノンがテレパシーを使っているようだ。

「OK。」

カイも心の中で念じてカノンにとどいたかどうかは分からないが黒板の前に立った。

「俺の名前は武藤カイです。今年一年よろしくお願いします。」

「自己紹介ありがとうございます。さあて次は毎年恒例のスーパー鬼ごっこお！」

真が酔っ払ったかのようにマイクをつかみ叫んだ。みんなもそれに答えるかのようにもり上がりはじめた。

「スーパー鬼ごっこのルールはこの学校の全地域で鬼から逃げきるゲームです！時間は三十分！無事逃げきった人は願い事を我等がアイン校長に叶えてもらえます！」

校長の写真が机の上に飾られた。

なんかアイン教授の追悼式になってるような……。

「それで鬼は誰だい？」

生徒の一人が真に聞いた。

「ええっと、本物の鬼です！」

教室に人間外の生き物が入ってきた。

「この鬼に捕まったら、その後はどうなっても知りません！捕まったら者は、鬼に肉を上げてください！解散！」

机の上に、大量の骨付き肉が置かれた。生徒は順にその肉をとっていった。その中に殺気あつたばかりの生徒会長もいた。相当なやる気が感じられた。

「カイ。ここは共に行動しましょう。効率のいいやり方でクリアしたいのですから。」

「わかった。俺もあんな怪物には襲われたくないからな。」

カイは鬼を見て怖くなったのかすぐに教室を離れた。

教室を出た後、すぐに先生からもらった地図を取り出した。この学校は、ハリポタのホ ワーツみたいに、秘密の部屋が隠されているんじゃないかとずっと疑問に思っていたからだ。

「なるほど……。隠し通路を見つけるつもりですね？それならば……。」

カノンもカブトムシに何かを伝え始めた。

あの様子から俺と同じ事をしているようだ。

「カブトムシには外から、学校の隠れやすい場所を探してもらいます。」

「俺たちは中からだな。」

「そうですね。早速探しましょう。」

カノンが言った。

「おおっと。俺も混ぜさせてもらうぜ。」

後ろから背の高い赤毛の男が話しかけてきた。

「……こんなところに野生の鬼がいます。」

「……だな。」

二人は白い目で赤毛の男を見た。

「違っつて！俺鬼じゃないから！」

「まあいいでしょう。丁度この学校をくまなく探し回るだけの体力を持つ人を探していたところですから。」

「なんか俺の役割がパシリになってるんだけど……。」

二人の会話を聞いていたカイが笑い出した。

「何がおかしいんだよ！」

「お前ら……漫才やつても結構いい線までいけるんじゃないかって思ったら……ついこらえきれなく……なって。」

カイはとうとう腹を抱えて笑い出した。

それを見ていた二人は、ほぼ同時に首を横に振った。

「あの～私も入れてくれませんか？」

「あぁっ！君は……生徒会長！」

カイは名前を忘れてしまっていたので代名詞で何とかごまかした。

「何？今の空白……。それはいいとして、私どんな手を使っても鬼から逃げたいから協力してくれえる？」

顔が微笑んでいるのにやけに声が不気味なのはなぜだろう、とカイは思った。

「い、いいぜ！生徒会長なら歓迎だ！」

めちやくちゃ赤毛の男は照れているようだ。

「お前の名前は何だ？赤毛君。」

カイが訊ねた。

「俺の名前？……ラズリアス・ロード。ラズって呼んでくれ。」
ガタガタガタツ

ずっと教室の目の前で話していたばかりに、鬼が教室にいることを忘れていた。

「これはまずい！ひとまず逃げるか？」

「いやっ。追いつ返す！抜刀！」

キザ少年でもあり赤毛で天然でもある少年の初めての活躍だった。なぜか、ズボンに木刀が差してあり、それをみんなに渡して一人で鬼に突っ込んで行ったのだ。

「あいつは……いい奴だった……。」

カイが嘆いた。

「おい！まだ死んでねえよ！」
ラズが叫んだ。

「そのぐらい分かってるさ！」

カイもあらん限りの声で叫び返し、持ち前の運動神経を生かし鬼が投げてくる机をすばやくかわした。ラズは、机にきれいにあたって教室から帰ってきた。

「何をやっているのです、赤毛。見事にあたってくれとは言ってますんよ？」

カノンがきつい言葉を述べた。

「おうよお！だが、やたらと机が多くてな。」

「返すわ。この木刀。」

怜奈が木刀をラズに投げ返した。

「おいおい、逃げるって言うんじやないだろうな？」

「まさか！この私が鬼から逃げると思ってる？」

そういつて、黒帯を締め鬼に素手で挑んでいった。そのころカイは、人間の反射神経の限界のスピードで木刀を、鬼に突き刺していた。

「うおおおおお！普通の学園ドラマがなんでんアクション映画になるんだよおおお！」

どうやらいろんな不満を鬼にぶつけているようだ。

だが、さすがに鬼もそう簡単には退いてくれず、不愉快そうにカイを見すえていた。

「はあっ！」

背後から静かに近づいていったレナが、足で鬼をけりつけた。これはクリーンヒットしたらしく、鬼の顔がゆがんだ。

「よし！さっさとここから出て行け！」

カイが、わめきながら鬼に体当たりした。鬼も疲れてきて別の獲物の場所に行こうと、ベランダから飛び降りた。

それを見ていたラズは

「結局俺たちは出番なかったな……。」

と呟いた。

「ええ。まさかあの二人がこれほどまで強いとは思っていませんでした。」

カノンも呆然としていった。

「ふう〜。フエンシング、剣道、中国の留学しておいてよかったあ〜。」

カイが机を整理しながら言った。

「へえ〜。結構やるじゃない。転校生があそこまで鬼を練り締めたことは今までで一回もないわ。」

怜奈が素直に感想を言った。

「まつたくだ。ただだけ鍛えてんだよ。」

「恐ろしい人ですね。青の鬼に恐れをいだかないなんて……。」

みんなは口々にカイを褒めた。

「なあカノン。俺たちは秘密の部屋を見つけなくていいんじゃないか？」

「いえ。実は厄介なことにあの鬼は肉を食べることに進化していくんです。」

カノンがため息をついた。

「うそだろ！？あんな化け物とは二度も戦いたくはねえ！……戦ってないけど。」

「ですから三十分間逃げ切るほうが効率がいいです。」

カノンが言った。

「そうだな。ひとまずあの鬼には見つからず逃げ切ってみるか。」

カイの発言に三人は同意し、教室の中に入った。

教室の中には明らかに誰かがワザとおいたと思われる品物があった。

「なぜ……エアークンのスナイパーライフルがおいてあるんだ……？」

「これは天の恵みだ！存分に使わせてもらおうぜ！」

ラズが張りきってその銃をかついだ。カイは、てっきり何か仕掛けが作動されるかと思っていたが、何かが起きる気配は感じとれなか

った。

「・・・おかしいですね。」

「ああ、おかしい・・・。」

カノンがじつと銃を見つめた。そして、珍しく一人で笑い始めた。

「なかなか面白い仕掛けがされているではありませんかっ！」

そう言っつてカノンはラズから銃を奪い取り、教室にあるPCを起動した。

「いったい何が起きているんだ？」

「この銃には追跡装置がつけられているんです。今から、それをつけたPCの位置を把握しようと思います。」

目にも止まらぬ速さでキーボードを打つカノンは、正直言っつて不気味だった。が勇ましくもあつた。

「すべて解除できました。これでその銃に追跡装置の機能はなくなつたと思います・・・ムツ・・・。」

「どうした？カノン坊ちゃん。」

ラズが聞いた。

「ええっ！？それは困る！先生に出さなきゃいけないレポートたくさんあるんだから！」

怜奈が怒つた。だが、怒るところがずれているような気もしないわけではない。

「任せてください。ウイルス退治は私の専門分野であるのですから。」

カノンは言葉通りすばやく指をキーボードに打ち込んでウイルスをブロックしはじめた。

「・・・ですが、予想以上にウイルスが入り込んできているようです。ですから、時間がかかりかかります。もし鬼が来たら足止めしてください。」

カノンが汗を拭きながら真剣に画面を見ている。

「OKだぜい！俺たちにまかせやがれ！」

ラズがベランダに向かい、スナイパーライフルをセットしはじめた。「俺がやれるのはこれぐらいだから、中に入ってきたときはカイそして生徒会長！食い止めお願いします。」

「ありがとう、ラズ。俺たちに任せろ！」

「生徒会長としてここを死守して見せます！」

再び怜奈の目に火がついた。

「あっ……あの鬼、さっき見たときよりもかなりでかくなってるぜ！」

ラズが下を見ながら言った。

怜奈とカイも一緒にベランダに出た。見たところ前よりも気持ち悪くなっている。

鬼もこつちに気づいたらしく、いやらしく笑っている。たぶん、そろそろこつちに向かってくるだろう。

「お前たちベランダから離れな。危険だぜ。」

ラズは早速標的めがけて発砲し始めた。（良い子のみんなは相手が鬼であろうと真似をしないように）スナイパーライフルではあるが決して、実弾ではないので相手を食い止めるぐらいしかできない。

「フツハツハツハツ！こんなもの痛くもないわ！」

鬼が言った。

「あいつしゃべれたんだな……。」

ラズが今までで一番良いアクションを見せた。

だが、本当に鬼は痛くないらしくベランダに飛び上がった。

「後は任せろ！」

ラズがライフルごと鬼に投げつけ、教室の中に入ってきた。

「ちっ、成長するの早すぎるんだよ！」

カイは、今までにないスピードで切りかかった。それを鬼は両手でガードし、鋭い爪でカイに切りかかった。カイはとつさに、地面にしゃがみこみ鋭い払いをよけ、再び鬼の頭に振りかざした。だが、鬼もそれを見越していたらしく、見事に木刀を両手で押さえ、その

まま固まってしまった。

「おいっ！会長は助けなくていいんすか？」

「男同士の戦いだから女が手を出しちゃいけないでしょ？」

怜奈が答えた。

「確かに。だけどあいつ男か！？」

二人とも鬼を眺めた。鬼は二人の光線のような視線に、照れるように笑った。

「・・・女みたいだから問答無用！」

とにかく怜奈は他人には理解できない答えの導き方で結論が出たらしく素手で鬼を投げ倒した。

「そうだ！その調子でやつちまえ！」

ラズはこの戦いを楽しむかのように叫んだ。

パワーアップした鬼も、すこし状況が不利になってきたことを察し周りを視わした。するとあるものが目に付いた。

それはカノンだった！

カイも鬼の狙いに気づいて、止めようとしたが圧倒的な足のスピードにまったく追いつけなかった。そして、鬼は走りながらパンチの構えをし、おもいつきり前に突き出した。

「こ、これは何だ！？」

なんとカノンの周りに、大量の虫たちが飛び回っていたのだ。

「ゲームクリアだな・・・。」

ジリリリリリッ！

三十分になったことを示す時計の音が学校全体に響き渡った。

その瞬間鬼の中から何かが出てきた。それを見て四人は呆然とした。

「せ、先生！」

なんと、鬼の招待は担任の先生ゼル・ローレシアだった！！

「いや、熱い熱い！・・・カイ、なぜ私がこんなに筋肉がついているのか分かったら？」

カイの頭の中に先生にはじめてあったときの会話が再び再生された。「なるほど。そういうことだったのか・・・。」

安堵と同時に疲れがどっとおしよせ、カイとほかの三人は深い眠りについた。

第二章のおまけ

第二話から数時間後・・・
職員室にて

カイの担任であるゼルは、歓迎会で無事勝ち残った四人の生徒をソファに静かに下ろした。そして、肉をたくさん詰め込んで膨らんでいる鬼のキグルミをゴミ箱に放り投げた。

鬼のキグルミは、異臭を漂わせながらゴミ箱に見事に収まった。

「ふむ・・・。順調にやっているな。」

ドアから一人の男が入ってきた。白衣に身を包んでいるがその姿はまぎれもなく校長の姿であった。

ゼルが聞いた。

「校長！来ていたのですか？」

「弟子の面倒を見ない師匠はこの世にはいない。・・・それよりどうだ？様子は。」

「もちろん、計画通りに進んでいます。彼ならこの一年間を乗り切ってくれるでしょう。」

「では引き続き武藤カイの世話を任せてもよいな？」

カイの担任ゼル・ローレシアは、こくりと頷いた。

校長は、職員室のソファーに横たわるカイ達を眺めた。

ぐっすり寝ているようだ。あれほど苦しいことがあったという顔は穏やかだ。

よほど楽しかったのだろう。

「ですが・・・計画通りにやるつもりはありません。」

ゼルが突然切り出した。

「ほおう。なぜだ？」

「彼は私たちが手を加えなくても変わってくれるからです。」
ゼルは言った。

思いがけないことに、校長は笑った。

「私もカイを人形のように扱うつもりはないよ。・・・この子達を見ていると、そう思うことしかできなくなってしまった。」

「私もです。」

二人はまるでカイの親でもあるかのように、カイを温かく見守った。

読者の皆さんはお分かりだと思いますがこの歓迎会は、生徒とカイの仲を深めるためでもあり、ずっと研究室にこもっていたカイの人間としての感情を取り戻すためのものでもあるのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8847f/>

忘れてはいけないもの

2010年10月11日11時50分発行